

## 「最初の教会、その生活」（使徒2章37-47節）

### 1 教会の始まり

キリスト教には長い歴史と伝統があります。教会はその中心にあつて宣教の使命を果たしながら今日にいたっています。

使徒言行録はこのキリスト教の歴史の始まり、教会の誕生のいきさつを知ることができる他にない貴重な文書です。

始まりというのは、もちろん現在からすれば、過ぎ去った、昔のことですが、現在と無関係かという決してそうではありません。始まりというのは、つねに、したがって今もどこかに顔をのぞかせているものです。伝統といわれたり何とか精神といわれたりして生きつづけているものです。私どもの教会の八十年史を見ると、「家の教会」として始まり、転々としながらも多くの方々の協力によって北星バプテスト教会として産声をあげたことが記されています。個人の善意に支えられてというようなことがどこかに生きている教会だと認識して間違いないでしょうか。

さて使徒言行録が描いているのはイエスがいわば聖霊にバトンタッチし、この聖霊に導かれて教会が歩み始めた時代です。年代でいうと紀元30年から60年ぐらいにかけての時代です。

この間に教会の基礎ができあがります。イエスの弟子・使徒たちの語ったことがまとめられ、聖書ができます。この聖書にもとづいて信仰のいわば筋道といったもの（信条）が明らかにされます。そして教会の組織、今日のように整えられたものではありませんが、牧師とか教師とか、あるいは監督、長老、教会の役員ですね、そうした役割が機能しはじめていきます。むろんそうしたことは、この時期に全部出来たものではありませんが、伝道の拡大と並行して、信仰の母なる教会の形成へ向け動きが活発になっていく、それがこの時代です。

この時代の教会の発展には、一つの大きな節目、あるいは転機といったものがありました。それは、はじめてエルサレムに誕生した、したがってその構成員はみなユダヤ人からなっていた、文字通り最初の教会が、伝道によってひろがっていくと、そこにユダヤ人でない人たちが、いわゆる異邦人のクリスチャンたちが加わってくるということです。これは大きな変化を呼び起こします。もともと大きな変化は、それまでユダヤ人たちが大切に守ってきた掟、律法について、キリスト教信仰にとって不要なものとされたことです。つまり人は律法の行いによってではなく信仰によって救われるのだということ、それが確立されたことです。一つ聖句を引用しておきます。

あなたがたは、恵みにより、信仰によって救われました。このことは、自らの力によるのではなく、神の賜物です。行いおこなによるものではありません。それは、だれも誇るべきでないためなのです（エフェソ2・89）。

自分の力によってではない、恵みによって救われる。こうしてキリスト教はローマ帝国内の異邦人のあいだに広がっていきます。反対にユダヤ人はキリスト教にますます敵対的になっていきます。

今日の聖書箇所は、教会がそのように異邦人のあいだに広がっていく前の、ユダヤ人からなる、エルサレムに成立した最初の教会の様子を伝えている箇所です。ここにいた人がユダヤ人であったことは、ペトロとほかの使徒たちに対し彼らが「兄弟たち」(37節)と呼びかけていることに明らかですし、またユダヤ教からキリスト教へ、その間の、教会としてはまだ過渡的な段階であったことは、家々を集まりの場としていただけでなく、5節によれば、「毎日・・・神殿に参り」とあり、ユダヤ教徒と共通のつとめも熱心に果たしていたことから分かります(3・1)。

## 2 すべての人に恐れが生じ

最初の教会のこうした記事に接すると、ここに書いてあるのが理想の教会の在り方で教会はそこからだんだん墮落していった、墮落までいかないとしても悪くなっていた、したがってそこに戻らなければならない、戻ることを目標としなければならない、私どもは考えがちです。

しかしそうでしょうか。そうではないのではないかと私は思います。一番最初が一番よくてだんだん悪くなっていくというのでもないし、反対に、はじめ未熟でだんだん進歩し、最後に理想的なものになるというのでもないだろうと思います。すべての時代は直接神に接するという歴史家の言葉があります。昔がよくて今が悪い、昔は悪かったけどだんだんよくなるというのではない。人間の文化とか文明ということにならそういうことはできるし、そういつておかしくない。しかし教会は必ずしもそうではない。神は昔も今もその民と直接の関わりをもっていた、私どもの時代も、私どもの教会も、神と直接の関わりをもっている。こう考えてはじめて使徒言行録に伝えられた教会を私どもは正しく理解し、そこに学び、慰めを受け、戒めとすることができるとは思いません。そうした中で注意したい言葉の一つは「すべての人に恐れが生じた」という言葉です。

彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった。すべての人に恐れが生じた。使徒たちによって多くの不思議な業と行わられていたのである(42-43)。

〈おそれ〉という日本語には、およそ三つの意味があります。一つは恐怖です。もう一つはこれから起こるかも知れないことに対する心配や不安です。もう一つは、かこまること、敬意、畏れ敬うことです。

聖書は、2節と43節のあいだに小見出しがあつて、二節が分断され、「恐れが生じた」のは、後の言葉、すなわち、43節の後半、使徒たちによって多くの不思議な業

とするしが行われていたとだけに関連し、その結果そこに生じた空気、ある感じといったものとして理解されますが、おそらくそれは前(55節)とも、つまり使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった、とも関連づけられるものだと思います。ともあれこの最初の教会の群れに神に対する恐れが生じていた、畏れ敬うことが支配していた、神がここに在すということが一人一人に強く意識されていた、それに注意したいのです。

さつき申し上げた一番目と二番目の意味の〈おそれ〉、すなわち恐怖、また心配や不安という意味の〈おそれ〉なら、私どものだれもがそれをもっているといわなければなりません。そうした恐れを、毎日の生活に追い立てられ、忘れていくかも知れません。しかしこころの深いところでそれらがなくなることはない。一人になったり、ふっと考えたりして、そうした恐れに私どもはしばしば向き合うことになります。病いや死に対する恐れ、老いに対する恐れ、孤独に対する恐れ、他人(ひと)に対する恐れ、愛されないこと、理解されないことへの恐れ、将来への恐れ、今生きることの恐れです。こうした恐れを、この最初の群れの一人一人ももっていなかったことはありません。しかし彼らは同時に真に恐れるべき、真に畏敬すべき方への〈おそれ〉ももっていた。神を恐れ畏敬することを知っていた。その方を恐れないとき人はあれやこれやの恐れにとらえられる。私どもの人生を決定的に左右する方を恐れるとき、あれこれの人生の恐れはやがて克服されていくのではないのでしょうか。そうした神への「おそれ」が生じた、群れを支配したとき、すべての物を共有したり、財産や持ち物売り、おのおのの必要に応じて、皆がそれを分け合うというようなことも可能だったに違いありません。

### 3 パンを裂き

恐れを一つのキイワードとして私どもは、初期のエルサレムの教会を理解してきました。一つ前にもどって、この最初の群れがしていたことを、今の教会のことと比べながら確認しておきたいと思えます。

彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった(42)・・・毎日ひたすら心一つにして神殿に参り、家ごとに集まってパンを裂き、喜びと真心をもって一緒に食事をし、神を賛美していたので、民衆全体から好意を寄せられた(46-47)。

エルサレムの教会の様子がここに描かれています。毎日決まった時間に祈りのため神殿に行っていたこと、週のはじめ、日曜日に、家々に集まって、家の教会で、パン裂きをふくむ礼拝をささげていたことなどです。ユダヤの習慣にしたがって水曜日と金曜日に断食していたことも知られています。

パンを裂くことに、この箇所でも2度言及されています。この言葉は食事を始めるという意味でも使われますが（使徒20・11）、今日の聖餐式を意味するものとしても使われた言葉です（1コリント10・16）。最後の晩餐の席で、イエスはパンを取り、賛美の祈りをささげ、それを裂いて与えています。それ以来パンを裂くという行為は聖餐式を象徴するものとして受けとられてきました。そうしてキリストの体の一部をいただく、それは、いわば見える言葉として、私どもがキリストと一つとなることを語っています。

今日の聖餐式とくらべて、一つの大きな違いは、当時、パン裂きが、教会の食事の会の中でその始まりを告げるものとしておこなわれていたことです。教会のそうした食事の会は愛餐と呼ばれていました。聖書ではアガペー（愛を意味する語）という言葉で呼ばれています。最後の晩餐でもそうであったように、食事の途中で、あるいは始まりのところで聖餐式が、つまりパンを裂くことと、ぶどう酒を飲むことがキリストと一体となる意味でおこなわれていたのです。

しかしこうした食事の会の中で、あるいはその始めに聖餐式がおこなわれることは今はほとんどなくなっています。理由があります。パウロの手紙の中に、当時一緒に食事をし聖餐にあずかるために集まるのに、他の人が来るのを待たず、飲んだり食べたりして、自分たちだけでも「できあがっている」ような人が出てきたのです。このアガペーは貧しい人々への給食という意味をもっていました。そうすると一部の人の行為は貧しい人を辱める振る舞いだということになります。パウロはこう戒めています。「わたしの兄弟たち・・・食事のために集まるときには、互いに待ち合わせなさい。空腹の人は、家で食事を済ませなさい。裁かれるために集まる、というようなことにならないために」（1コリント11・33-34）。やがて聖餐式は愛餐から切り離され、とくに信者のために独立しておこなわれるようになります。

今日の箇所の、パンを裂くことが、現在の聖餐式と印象の異なる点がもう一つあります。ここには、キリストの十字架の死を記念する・思い起こすというより、「邪悪なこの時代から」（40）救われた喜びが、強く表れているということです。「喜びと真心をもって」一緒に食事をし、とあった通りです。イエスの復活によって開かれた希望と喜びの食卓、イエス・キリストの主宰する盛大な主の食卓、その先取りがパン裂きでした。

さて今日は、最初の教会、エルサレムに誕生した最初の教会の様子を聖書によって辿ってみました。連続している面と、そうでない面とがあります。でもどこかにここにある始まりが生きているのが教会です。その上で私どもは私どもの置かれたこの時代の中で神に対し世に対し宣教の責任を果たしていきます。私どもはつねに始まりに立ち返って歩みを整えていかなければなりません。聖書に立ち返り、神の言葉に立ち返って、教会の在り方を見直し、宣教と伝道の課題を果たしていきたいということです。御言葉によってつねに改革される教会、それが私どもプロテスタント教会のモットーなのです。

(2018年7月15日)